東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹
倉橋惣三

第二十三卷　第一二號

東京　教文書院　發行

第二十三卷　幼兒の教育　第十二號

目次

會員諸君へ　主幹　倉橋惣三……二三二
大災と幼兒教育　倉橋惣三……二三四
不良兒の研究に就て　東京市囑託　三好豐太郎……二三七
新年を利用して子供の矯正　天野誠齋……二三五
長詩　春の廢園　橋爪健……二三八
童謠　手毬と紙鳶　文學士　吉丸一昌作歌　楠美恩三郎作曲……二四〇
律動遊戯　手毬と紙鳶　土川五郎振付……二四〇
叱り方いろ〳〵　天野誠齋……二四二
大震雜感　坂內ミツ……二四六
本願寺託兒所について　記者……二四八
お茶の水の幼稚園の燒け跡に立ちて　倉橋生……二五一
東京市の罹災幼稚園　記者……二五四
小說　お春　東京女子高等師範學校教授　岡田美津……二五六

東京女子高等師範學校附屬幼稚園保姆兼教諭　坂内みつ子先生著

子供の遊ばせ方

四六版美本　一一月發刊

子遊供をばせる

ことは中々難しいが又愉快なものである。幼兒教育の理論と實際に精通した著者の、子供に對する遊ばせ方の研究書であります。學校でも家庭でも備ふべき良書として御勸めします。

目次

子供を遊ばせるといふ意義
子供を遊ばせるに大切な條件
子供の好む遊びの種類
子供の好む玩具の種類
玩具選定の標準
子供を遊ばせる方法
室内遊び
園體遊び
お話
個人的遊び
室外遊び

以下數十項

發行所　東京上野公園寛永寺坂下　教文書院　電話下谷三〇四七番　振替東京四六一一一番

天野誠齋先生著

羽二重表紙新型桐入美本
正價各金貳圓
送料各拾參錢

乳兒の育て方 一編
生後から三歳迄

幼兒の扱い方 二編
四歳から小學二年迄

兒童のしつけ方 三編
小學二年から六年迄

實驗

—から出た著者三十年苦心の育兒叢書

我國の婦人は、子供の病氣と治療に對する手當の知識が薄いために、子供の死亡率が世界各國中で日本が一番多いと云はれてます。是れは大部分が母親や諸姉が斯道の知識に乏しいのが最大の原因です。

著者は育兒專門家として、我醫學界に又婦人界にも御馴染の愛兒敎養に對する實地の研究家で、最近の嚴ましい育兒問題に對して、三十年の實驗を悉く發表したる、母への指針として絶好のものであります。

發行所 東京永寛上野寺公園下坂 教文書院 電振替下東京 三谷四〇 七四

東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹
倉橋惣三

第二十三卷　1923　第一二號

會員諸君へ

主幹　倉橋惣三

今回の大災により幾多の御不幸に遭遇せられた方が、我が會員諸君の中にも尠くないと思ふのであります。會からは、一々直接にたたづねもし、御慰安も致すべきことゝ存じながら、其の意を盡さず。不本意に打ち過ぎて居ります。たくればせながら、茲にお見舞ひ申上げます。

本會は、事務所として居りました、東京女子高等師範學校附屬幼稚園は全燒しましたが、會の重要の書類は幸外に持ち出して居りましたので、會務の上に格別の支障がありません。御安心を願ひます。

本誌は、九月號の發送を大震の前日に終つて居りましたことは、誠に幸のことでありましたが、其の後は、印刷所の燒失のために、お斷りもせず一時休刊

たしました。就ては之れは御諒承を願ひまして、新たに十二月號から舊通り續刊することゝいたしました。讀者諸君に對し、甚だ愛顧に背くものでありますが、此の場合御諒承を願ひます。

尙ほ此の際に於て、本會のために、一層の御同情を切に願ふ次第であります

震災の結果印刷工場は原稿、原版と悉く燒失し、是非なく休刊致しましたが、其後鋭意復興に努力致し一方、埼玉縣大宮町の印刷工場秀飯舍に依頼しまして、本拾二月號が續刊出來たのです、原稿も不備、印刷も不備、裝幀も不備の折柄、斯る製本で發行できたのは非常に良成績なのです、會員諸君には不滿足でもありませうが、何卒此點御諒承を願ひます。來拾三年度は印刷工場も復興致しますから、洗練した原稿を滿載して御滿足を得るやう努力致します。

發行所

○假事務所　本郷區弓町二丁目二十五番地　坂内方

○發行所　(從前通り)東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)　教文書院

大災と幼兒教育

主幹　倉橋惣三

一

九月一日の大震、つゞいて大火。關東が被つた災害は、實に人間生活のあらゆる方面に渉りて、未曾有の不幸と悲慘とを與へたのでありました。教育も亦非常の打擊を受け、初等教育、中等教育、高等教育いづれも其の校舍を倒潰し、教具を燒失し、其の損害、殆んど擧げて數ふることが出來ません。我が、幼兒教育界も亦其の厄難を免るゝことが出來なかつたのであります。

之れを單に東京市のみに就て見るも、幼稚園の燒失せる、官立一、公立十、私立三十三の多數に上つたのであります。公立としては約三分の二、私立としては約半數といふ大きな割合にあります。尙ほ託兒所の燒失せるもの十四、殘るもの僅に三四に過ぎないのであります。平常と雖も、東京市の幼兒保育事業は、其の數に於て決して盛なりとすることが出來なかつたのでありますが、此の大慘害に對して、實に言ふところを知りません。

幸にして燒失の災を免れたものも、今尙ほおか〳〵常態に復し得ない有樣にあります。兎に角〳〵開園の運びに至つたものでも、出席幼兒數が平生の如くでないのは勿論、種々の方面に於て、多くの不自由と不完備の狀態にあります。素より、今日の此の東京に於て、已むを得ざることには相違ありませんが、轉た寂寥の感に絕にません。

但し、災後、不幸なる罹災幼兒のために、市内到る所に開設せられた保護事業は、其數に於ても、當事者諸君の熱心に於ても、實に特筆に値すべきものでありまして、急に應じ、機に臨む緊要の施設として、幼兒保育の問題も亦決して忘れられて居なかつたのであります。市内の所謂大バラック地には、東西本願寺、救世軍、同愛會、一燈園等によつて、直に托兒所の施設が始められ、其他にも亦、種々の方面の計畫が、日と共に起されて居ります。之れがために當局も亦大に意を用ゐて居るのは言ふまでもありません、たゞに託兒所のみでなく、幼兒のための診察、營養、慰安、娯樂、の方法も亦、それ〴〵講ぜられました。たゞ、何分にも、其の必要範圍の廣大なことゝ、各方面に緊急の多事を極めて居るとのために、思ふ樣には行き屆かない點のあるのは己むを得ないことであると共に益々充實させなければならぬことであります。

二

斯うした事實を目の前に置いて、どうしても私達の胸に浮んで來なければならぬのは、將來の問題であります。すなはち、(一)、斯くも打擊を受けた幼稚園敎育を、どうして復舊させようかといふこと。(二)、たゞに復舊ばかりでなく、從前からの希望を遂行して、新らしい擴張と充實と實理するためにはどうしたらいゝかといふこと。(三)それからまた、今度の事變が生んだ多くの幼兒保護施設を、單に臨時のものとして終らせないで、我國の幼兒保護施設の一般的發達の方へ導いてゆくにはどうしたらいゝかといふこと。などの問題であります。而して之れ皆幼兒問題關係者のために、困難ではあるが、併し、元氣を振ひ起させる問題ではありませんか。

此の際、東京市公立幼稚園協議會が、之等の問題に就て、必要の協議を重ね、實際的にも種々の靈力を試みて居ることは、頗る吾人の意を强ふすることであります。勿論、小學校の復舊さへ、容易でない

とされて居る場合とした、財政上の點からは、非常の困難のあることは、何人も諒することでありますが、しかも亦、罹災地に於ける目下の家庭狀態、社會狀態が學齡前幼兒の幸福と正しい生活とを脅かして居ることは、實に甚しいものでありまして、現在としては幼兒の問題ですが、其の結果としては、國民生活上の大きな憂慮とすべきことなのであります。生活の不規律、親の不注意、情操教育の缺陷、營養の不足といふ樣なことは、擧げて數へれば數ふる程、吾人の心を暗くするものが多いのです、すなはち、教育上の點からは、今日こそ、社會が幼兒教育のために、特に力をつくすべき必要に迫つて居るのであります。之れは、私達の言を俟たず、心ある市當事者も、區當事者も充分諒解して居ることで、現に、財政上の無理を打ち破つても、此の教育上の切なる要求を充たすために、勇敢なる努力を示して居らるゝ方も尠もくないのであります。之れ實に、吾人の深く感謝するところであると共に幼兒教育の理想に於て、更に無限の努力の必要を痛感せずには居られないところです。

尙ほまた、此の不時の變災から起つた臨時の必要が生んだ幾多の幼兒保護施設は、今に於ては實に臨時的急務として行ふてるものでありますが、しかも、其のいづれも皆、平時に於ても社會的に必要のあるものばかりでありまして、臨時の必要が終つた後も、之れを平時的社會的幼兒保護施設の發達の機械たらしめてゆかなくてはありません。嘗て、濃尾の大震に際して生れた石井氏の孤兒救濟が、あの偉大ある岡山孤兒院となり、我國孤兒保護事業の發達上の基本となつたと同じ樣に、今日生れた幾多の臨時的幼兒保護施設から、永久的な或る發達が繼續もれる樣にしなければありません。勿論、其の位置や方法に於て變化の必要もあり、今のまゝ續けるといふ譯ではありませんが、之れがもとゝあつて行つていゝものが多いと思ふのであります。いづれにせよ、お互の大に力をつくすべきです。

不良兒の研究に就いて

東京市囑託　三好豊太郎

(一)　緒言

大都市に於ける異常なる人口の集中と其れに對應する社會施設の缺陷は近來益々不良少年少女の數を增加しつゝあるのであつて其害毒は愈々擴大されつゝある有樣である。若し斯くして機宜の處置を誤るが如きことあれば、誠に將來長く禍根を社會に殘すものであつて社會教化の爲め寒心に絶えざるものがある。之れが問題の解決は、早急なる處置を取るべきものではあく充分に社會診斷を行うて而して後に具体的對策を講ずるの要があると思はれる。彼のリッチモンド女史の社會診斷の書中に少年裁判所が社會診斷の發展に對して貢献する處頗る多かつたことを述べて居る。(Richmond, Social Diagnosis) 眞摯ある社會診斷の後に出づる對策こそは眞に不良少年問題に對するコンパスを提供するものであつて問題解決の鍵は之を措いて外に求めることは出來ない其れは恰も醫師の投藥に於ける診斷と何等異なる所あるを見ない而も現實に於ては斯かる明白の眞理が往々にして閑却せられやゝもすれば直觀的なる一時的政策や秘密主義の司法警察の流行するのを見るのであるが其れは誠に社會科學のαを知らざる蒙の致すところでなければならぬ(科學の方法論では直觀は第一に愼しまねばならぬ此の事は決して全然直觀を斥けるのではあいが閃いた直觀は先づ嚴かに測定して之を統計的に證明するの要がある野外作業が社會學の發達に貢献すること多いと稱ふるチエーピンの見解も茲にある(Chapiu, Field work and Social Research)

東京市内の不良少年に對して從來市民の脅威さるゝもの誠に多數であつて、之れが適當ある對策の攻究は忽諸に附すべからざるものであつたのであるが從來殆んど此の方面に於ける診斷をなされたるものがなかつた尤も曾に東京府と云はず不良少年の個々に就いての調査は本邦にては二三の少年監獄以外に公けにされたるものはあまり無いのである、外國に於ては獨逸にて有名なるハンスグルーレや米國のヒーリーやゴッダードの論文が發表されて就中二者は何れも斯學研究者の經典とも云ふべき價値を持つて居る之等の研究に於て前のグルーレの研究は僅かに一〇五人であり、ヒーリーの研究は其有名なる「個人的原因の犯罪」と稱するもので八一三人である。今回余等が東京市社會局に於て考究したるものは東京市附近の不良少年に對して未だ何等着手されなかつた未開地であつた不良少年の問題に對して手を染めたものであつて此の點に於ては些かにても後の研究者の參考となること少くは無からうと考へるのである。

(二) 調査の結果

之より調査に依つて概況を記すこととする。

(一) 居住地　環境が個人の各種の事項に影響することは洽ねく人に稱へられる處であつて氣候が或は各種の文化現象を現定することや地勢が地方民の慣習に作用することは夙に述べられて居る處である本項に於て見た處は斯かる廣汎なる區域でなく現に居住して居る市内の狀態が如何であるか山手下町郡部等に分けると其何れの部分に最も多いかと云ふことを取扱つたのである、調査の結果に依れば最も多いのは本所區であつて全体の十二%を占めて居り本郷區は最も少く僅かに一・二六%である之等の關係は更に下町と山手の間でも明かであつて下町は最も多く三八%を占め、郡部は之に次ぎ山手は最も少い之等の關係は其居住地居住者の如何や附近の娯樂場の如何に基づくことを示すのであつて都市計劃の施設は

更に進んで娯樂區域工業區域住宅區域の區劃に對してより多く考究すべきものがあることを示して居ると思はれる。

(二) 出生地　米國に於ては其生國關係が混淆し伊太利人や黑人等が不良少年の大部分を占むることに就いて種々の報告に接するのであるが本邦に於ける大都市に於てもかゝる關係は將來益々紛糾して行くものと思はれるのである幸にして尙外國人の雜種の問題はさまで宜しくなつて居ないが歐米人支那人等が近來本邦に移り住むもの極めて多くなつて來たのであつて將に今後の問題であると思はれる、然しながら本邦內部の內地移住は盛んに行はれて居つて封建時代の銷國的色彩は著しく無くなつた此場合不良少年の出生地が如何なる土地に多いかは極めて興味ある問題である。

統計の結果に依れば最も多いのは東京、千葉、新潟、群馬、茨城、長野である此の中東京や千葉の多いのは距離の關係上當然であるが新潟や長野の多いのは其土地獨特の經濟的關係が影響して居るのではあるまいかと思はれる又更に地方別に之を見れば關東地方は最も多くして中部地方及奧羽地方が之に次いで居る之れも矢張り前者の關係と一致したものを思はれるのである。今出生地を市町村別に見ると市部のもの三七%を占め町村二八%を示して居る此關係は地方の農村の生活の逼迫せるが爲めに曾つて一般に稱へられた樣に農村が必ずしも子女の敎養地として良好ならざるに至つたことを示して居るものと思はれる要するに之等の事實は大都市の社會施設が如何に進むも農村が盛んに其胞子を培養して居る場合にては到底不可であつて宜しく都會と農村とが相併行して進むことの必要なることを物語つて居ると思はれるのである。

(三) 年齡　年齡は生理的に心理的に少年少女に至大の影響を與ふる彼等の年齡が如何なる構成をなすかは興味ある問題であるか調査に依れば男子は最も多いのは十九歲であつて女子は十八歲である是で

も女子の方が男子より一年早熟であることが分るのである恰度此の頃は男女共に春期發動の前後であつて何れも異性を求めて徘徊する頃である父兄の最も注意すべきことであると思はれる。

(四)教育程度　教育が環境や遺傳に對聳して品性を淘冶する效果のあることに就いて學者の中尚異論を述べる者もあつて極端なる論者は教育は何等犯罪を豫防し得るの力を有せず却つて知能的犯罪を釀成せしむるの力ありといふことを述べて居るのであるが少年を社會に適應せしむる手段としては最も重要なる位置を占めて居つて決して之を閑却することが能きない從つて教育が如何なる點に於て犯罪行爲と相關ありやを分析的に考究するの要がある統計の結果を見るに最も多いのは小學校程度であつて五〇%を占めて居り之れに次いで中學校や專門學校等順次して居る更に各教育程度を半途退學在學中卒業に分けて觀察する處に依れば卒業のものは數に於ては三三%を占め在學中及半途退學者極めて多い、兩者を合せると四三%といふ大きな數を示して居る、殊に中學以上のものに在學者の多いことを示して居るのであつて此點は餘程教育當事者の研究すべきものであると思はれる同時に小學校生徒には特に半途退學者が多くして小學校生徒總數の九一%を占めて居ることは極めて注目すべきである之の中には自ら招いて進學の途を絶つものもあると共に教育制度其の者が招いて居る弊害も決して尠くは無いと思はれる即徒らに劃一制度に流れて不良少年の大部分を占むる精神薄弱兒童と歩調を一にすることが能きないで劣等兒としての取扱を受くるのとを恥づる結果に出づることも尠くはないと思はれる。

(五)職業　不良少年の職業の如何なる種類に最も多いかは注目すべきことである乃事は第一に職業指導の上から考へられる事であつて自己の性格に適はない職業に從事することに依つて職業を怠り結果は惡友と交り不健全なる娯樂に耽潛して不良ある生活をなすに至る場合も可なりにある又職業の生活に對する保證が充分に無い爲に浪々として無賴不逞の徒とするが如きものもある尚考ふべきことは職業少年

の勞働條件の不良なる場合である、かゝる場合は或仕事より他へ轉々として職を換へ數回又は十數回に及び遂に全く生業を壓ふに至るのである、

統計の結果に依れば最も多いのは職工及徒弟の一九%であつて學生生徒は之に次ぎ一六%商店雇人及給仕八%である即ち學生生徒を除けば少年勞働者の分類に入るものであつて此點は大注意すべきものであると思れる彼等の保護政策に對してより深く進むことの重要なることを切實に物語つて居るものと思はれるのである

(十八) 嗜好趣味　嗜好趣味に沈溺して爲に其職業を怠り惡友に交つて不良少年の群に入ること多きと共に之れが費用に窮して犯罪行爲に至るもの少くないのである之等の嗜好や趣味は用ゐて適度なれば其弊害は少いのであるが彼等の多くが身体的及心理的缺陷を有して居つて之を抑制するに難くたゞ衝動のまに〳〵之に投じて其弊害を助長しつゝあるのである。以上の表に就いて之を瞥見せんと欲する。

今統計に就いて見ると最も多いのは興行物、音樂文學であつて其數三五%である飲食物、運動順次し最も少いのは性慾に關するものである興行物の中で最も多いのは活動寫眞の二五%である飲食物中では菓子最も多く七%を示し酒煙草を單獨に好むものに夫々次位にあるが兩者を合せると菓子を更に凌いで居ることが分る、之を以て見れば活動寫眞が彼等に對して影響することの如何に大なるかを考へさせられる其影響は不良映畫其自身より來る暗示も決して少くないのであつて放火を常習とする不良少年少女が映畫に於て炎々たる猛火を見て其騷擾に好奇心を持ちて知らず〳〵に火を點ずるに至るものが少くはない、惡映畫の取締は此點よりするも忽緒にすることを得ない事項である之加近來之れが觀覽料は益々高きを加へ貧困なる家に生れたるものは不良行爲に依らなければ、之れが資を得ることが出來ないそして衝動のまにまに家人の財寶を持出し次いで他の者を奪ふ樣になるものが可なりにある無料にて見得る野

外映畫の尙盛んなる勃興を望むと共にフイルムの檢閲に就いては充分の考慮を拂ふの要がある。

(七) 不良行爲　不良少年の不良行爲に就いて見るに最も多いのは財物に關するもので五二%を占め元は性に關するもの約三倍を示して居り身上及浮浪に關するもの順次して居る。女子に就いて見るも財物に關する犯は最も多く性、身上、浮浪、等順次して居る其等を細別して見ると財物の中には竊盜、詐欺、横領、脅迫が入り性に關するのでは誘惑、追隨、猥褻、艶書等である財物犯罪は男女を合すれば實に全体の半ばを越ゑて居るのであつて此事は前述した不良少年の職業と關聯し彼等の判然せるもの約三〇%が勞働者雇人等より來ることを考へると貧困と犯罪との關係に就いて暗示するがこと頗る多いことを感ずる之れは他の事實と待つて綜括の中に述べよう。

(八) 父母の有無　親の愛を知るのは社會生活の第一段である。友情や献身や博愛やは元から出づる分技であるが故に親の眞の愛を知るものは不良少年とおる機會あれば之を悔改めの道に導びくことを得るのであるが生れながらにして冷酷なる虚遇を受くるものは暖かき人間性に遂に觸れることおくして世を終ゆるに至らねばならぬ此點に於て少年が獨立し得るまで實父母の後見ありや否やは誠に後生涯を分つが如き重要する事項である。

統計の結果に依れば全体より見れば實父母のあるもの最も多く四五%をおして居るが實母の一を缺くもの二一%繼父母六%父母なきもの三%を示して居つて單に之のみが重要な原因ではないが然かも重要おる一方面であることは否定出來ない殊に其影響せらるゝものは女子であり又實母を缺く場合が實父を缺よりも男女共に影響を受くる如くである

(九) 兄弟姉妹數　之が關係ありと思はるゝは一人子の如く比較的放縱我儘なる生活をおすを強いらるゝものと多數の兄弟姉妹を有する場合の如き比較的自制して自己の衝動を抑制するものとがあつて此兩

者は比較的に重要なる關係をして居る統計の結果に依つて見れば多數なる男子では二人兄弟のもので一三%を占め女子は一及三人のものが最も多數を示して居り兄弟數の多いものほど不良少年少女の數を感じて居るものゝ如くである之は尙斷定は出來ないけれども今後に於ける產兒制限の問題と關聯して大いに研究すべきものであると思はれる。

（一〇）父母の職業　父母の職業就中其經濟的地位と父母の品性とが少年少女に影響することは頗る多いので之等は父母の職業分類を適當することに依つて其相關を考へることが出來ると思はれる統計表に依れば各職業別で最も多いのは工業及商業の有職者無職者等順次して之を要するに父母の職業中最も多いのは經濟的に不安なる生活を餘儀なくさるゝもの道德的頽廢生活を送れる家庭職業其物の誘惑の機會多き客商賣の如きか特に不良少年少女を出す傾向の强いことである。

（三）結　論

以上の記載に依つて不良少年の各種の事項に就いて概況を記したから之れが概念に到達することを得たことと信ぜられる。玆に上述した處のみに就て綜合すれば不良少年少女となることの原因の極めて多方面であつて從來は主として本人の意識的な原因のみを研究して居るがどうしても無意識的な方面にも研究を進め居住地の娛樂興行物の誘惑や貧困や敎育制度の關係等まで了解する必要がある殊に彼等の中、他府縣而かも農村に多いことや其職業が比較的少年勞働者に多くして學校は中途退學者を含まるゝこと多く嗜好としては多額を要する興行物に多く不良行爲は財物に關するもの最も多く父母の職業は比較的に被傭者殊に工業勞働者に多いことを考へると吾人をして貧困の禍することの深甚なること考へしめるのである此點に關してはボンガーは其の著（Bonger, Economic Condition and Criminality）に於て古來の文獻を涉獵して「結論して其多數が經濟的原因より來るもの多少は存するが同時に他の原因も同樣の意

義があると認めて居るけれども此の人々は經濟的原因を單に貧富等の意味に解し爾餘の社會的原因が經濟組織と如何に關係ありやを考へない即ち現在の生産組織と凡ての社會現象が必然的關係にあることに至つては概ね省略して居るといふこと」を述べてゐる。思ふに上記の考察に於て不良少年問題の重大なる因子たるべき都市集中や興行物の稀有ある發達や大いなる無産者の增加やかゝる現象は資本主義經濟組織の負ふ處頗る大なることを考へらるゝのであつてボンガーの所説は大部分之を贊するに難からぬのである。尙これに關して大方の批正を得ば幸ひ之に過ぐるものは無い。（一九二三、七、二三）

遊ばせるに必要な玩具

一　きちんと出來上つたものよりは容易に構成し得らるゝもの……積木・組み立・飛行機等
一　精巧なものよりは頑丈で容易にこはれぬもの……木製の玩具等
一　材料の繼續して供給され易いもの……畫法の用具・ボール・人形等
一　形はなるべく大きいもの。
一　利用する機會の多いもの。
一　色彩の美的なものにて無害のもの。
一　子供の嗜好に適したもの。

新年を利用して子供の矯正

天野誠齋

□新年と家庭教育

年の暮れと新年は、人が生活するに就いての大きい二つの關所です、もう今年も押しまつたと云へば、怠けて居た人までが、そろ〳〵警戒をしだしたり、お正月が直きに來るといへば、

『もう幾つ寢たらお正月が來るでせう』

と子供は非常ある樂しみをもつて、其の日を待つのです、けれども新月といつても別に新らしい月ではない如く、新年の實体は、矢張り去年の生活を前に置いて、子供に

『お正月以前にした惡い事』や

『お正月以前に學んだ事が、まだ十分でない事』

や、更に進んでは

『云つてはならぬ言葉遣ひ』や

『爾ういふ事は、古い年と共に、流れ去つたから之れから先きは新しく改めて、去年したやうな過ちや、しかたを成るべくしない事』や

是等の事を新年の初において、動物あり、植物ありのお飾りや、新年に就いて新に改まつて見ゆる萬物について對照して說明し、

『人間もこのやうにせねくてはならぬ』

と教へる事が必要です、

故に少々形式に渉つても、其から有きたりのお正月の儀式、家庭において例年あすべき事だけは正しくして見せる事が大切です、若し是等にも閑却して、

『あに新年だといつて、去年のつづきをするので

これを新年と稱し、初春などゝいふのは、人心を新たにして、更におすべき事を、もう一層よくしてやりたいと云ふ古人の賢い考へから來たものです』

であるから新年を單に娯樂の時、屠蘇を祝ひ、遊ぶときとばかり解しては大間違ひです、年の暮れの警戒もさる事ながら、新年の心持ちを、より多く生活の上、殊に家庭教育の上に應用して見たく考へます。

子供にとつてのお正月は、年中行事中一番に樂しい、一番に嬉しい、これだけ最も深い印象を與へるの時なのです、そこでお正月と云ふ目的物が來たのを、

『去年の生活のつゞきをするのではないか、子供には小遣錢でもたんと與へて、玩具でも買つてやつて、奇麗な着物でも着せて、餅でも喰べさせて、遊びたいだけ遊ばせれば宜いなどゝ云つて自分は去年の儘の服裝で、獨り室内に燻つて居る人が若しありとしたならば、其人の考へは進歩的でないばかりか、此の子供の最大娯樂の時機を利用すべき、唯一の家庭教育を忘れて居る怠けものと云はなければなりません』

□まだ來ない正月の樂み

娯樂の半面の教育、教育の半面の娯樂、其の利益と効果は理屈にならない、自然のうちに含まれて居り、また自然の中から生れ出るものです。またこの方が改まつて教育をするときよりも効果があるのです。

見やうによつて新年と云ふ時期は

『人に整理を與へ』

『人に規律を與へ』

『今迄なげやつて置いたことを、顧みさする』

と云ふ意味が大にありましやう。

之れを子供にしましても

『サアもうお正月が直きですよ、そんな汚ないお頭では笑はれますから、髪を刈つてお出でなさい、机の上もそんな亂雜では不可いから、奇麗

に片づけて置きなさい、お正月はお休みがつゞくから、今から其分を十分勉強しておきなさい』と云ふ如くしますれば、子供は、先づ其の聲に應じて十人が十人、まだ來ないお正月を樂しみに必ず言はれた通りにするものです。ですから子供を改めさすこと、新たに行はせることは、お正月のやうな、若しくは之れと同じやうな、子供として非常に愉快がる時と、場合を未來に於て、さうして大に實行を申聞するです、さすれば大抵のことは、譯もなく實行をします、つまり

『子供の實行』

『子供の反省』

には必ず娯樂の未來、まだ來らない夫れを目的物として、順々に申聞ければ、子供として左まで苦しめずに、効果が顯はれて來るやうになります。

子供は遊ぶのが本位であり、遊ぶのが仕事であります、その遊び方は年齢に依つて異つて居りますけれど、遊ぶには先づ遊びの方法を知られねばなりませぬ。遊ぶのが仕事であります、その遊び方は年齢に依つて異つて居りますけれど、遊ぶには先づ遊びの方法を知られねばなりませぬ。遊びの方法を知らす爲めには、大人が教へてやらねばなりませぬ。雨の降りつゞいた日などは、頭をしぼつて、遊ばせることに努力しなければならぬのであります。即ち子供を遊ばせるといふ事の意義は、二樣の意味を含んで居ります。

一は大人が直接遊び相手となつて遊ばせてやること

二は子供同志が自發的に遊び得るやうな境遇に置いてやること

（子供の遊ばせ方の一章より）

春の寝顔

橋爪健

戸外はおにか
聲もおく降りつもり
時折ページを繰るやうな音は
屋根を辷る雪であらう

妾は友への手紙を書き終へて
炬燵に疲れた頸を伏せ
ぢつと深い夜を聽いてゐる
心は恍惚と何かに誘はれる

雪に閉された冬の向ふに
白絖の帷を隔てゝ
ほの明るく眠つてゐる世界
かすかな寝息さへきゝとれる

妾がその透きとほる帷から覗いても
おゝ、そこに寝てゐる美しい天女は
黎明の花のやうな瞼を揺りもせず
間もなく醒める夢をば見てゐるやう

戸外には雪の精であらう
見知らぬ人の訪ひのやうに
時折慎ましいノックをしては
まだ氣配静かに彳んでゐる

手毬と紙鳶

文學士　吉丸一昌作歌
楠美恩三郎作曲

一、トン〳〵手毬の音の數。一い二に三つ四つ五つ、
六つと數へて七つになると、わたしは尋常一年生。
あらうれしいな、うれしいな。

二、ブン〳〵唸るは紙鳶の聲。天上高く見おろして、
畫紙鳶の達磨は力んで居れど、小さくなつては後しざり。
あら　をかしいな、をかしいな、

手毬と紙鳶

（幼年唱歌第一集）　土川五郎振付

一、とん〳〵手毬の音の數……蹲踞して毬に目を注ぎつゝ右手にてつく事七回、終りに直立す
一い二に三つ四つ五つ左手を出し右食指にて左拇指を折りて押さへ次に食指を次に中指を
折りて押さへ、かくして左五指を全く折る。

六つと數へて……手を開き右食指を左掌にあてる
七つになれば……左手を開掌のまゝ掌を向ふにむけて手頸より先きを立てゝ腕を伸ばす、
右手は食指と中指を殘して他指を握り左手の右に並べて出す
私は尋常……右食指を右上に高くあげ
一年生……右肱を曲げ食指にて頭上を上より指す
あらうれしいな〳〵……拍手足踏七回
あらうれしいな〳〵……「あら」にて兩手を少しく左右に開き「うれ」にて拍手し又開き次に
拍手かく四回繰返しつゝ右回轉す、

二、

ぶん〳〵うなるは凧の音……右足を一歩右に出し右上に揚がれる凧の糸をたぐる
天上高く……右足を一歩後ろに引き兩手を開き掌を上に向け上体をそらせる
見下ろして　兩掌を返して下にむけ躰の重みを左足に托し右踵を上げて前下方を見る
ゑだこのだるまは……兩拳を握り胸部に組む
りきんで居れど　一跳躍と共に兩足を左右に開き兩拳を兩側下方に伸ばす
小さくなつては…兩手を胸前に組み膝を屈げ体を少しく前下方に屈し、小さくおつて小足
にて後退す
あら　をかしいな〳〵　第一の歌と同じ
あら　をかしいな〳〵……第一の歌と同じ

叱り方のいろ〳〵

天野誠齋

□叱り方

子供を矯正さるゝとき、其の叱り方の善いのと惡いのとは、子供の將來に、いろ〳〵影響を與へますが、少くとも次ぎのやうな叱り方は親として注意しなければありません、詰り之れは、よくない叱り方であります

□お天氣叱り

機嫌のよい時には、大抵の惡い事は、笑つて見のがし機嫌のよくない時には、少しの事でも、手ひどく叱る、夫れを『お天氣叱り』といひます。

□無理叱り

子供を大人と同じやうに考へて、何事も大人の通りにならぬと叱る、これを『無理叱り方』と云ひます、子供はどこ迄も子供です。

□さきぎめ叱り

子供が大勢あると。兄弟爭ひをして訴へて來ます、そのとき、どの子供が惡いかをよく調べもせず、いつもあの子供がわるいから、又あの子供だと、始めからきめてかゝつて、誰々が惡るいと叱りつけます、これは『先きぎめ叱り』と云つて、きめられた子供こそ迷惑千萬です。

□皮肉叱り

子供がとりはづして、茶碗などを壞したとします……此時に子供があやまつて來ると

『あなたはよくおやりだよ、お利巧ですよ、よく落付いて居ますからネ』

おどゝ云ひます、誠に『皮肉な叱り方』でありますす、子供は斯んな風に叱られて、どんなに考へるでありましやうか。

□雷　叱　り

子供が何心なく、わるい事をして居ます、すると霹靂一聲、かみなりの落ちたやうに

『なんだお前は』

おどゝ叱りつけます、子供は何を叱られたのやらなぜ叱られたのやら、一向譯がわからず、唯眼の玉をぱちくり……よそで聞いて居ても冷汗が出ます。

□三　百　叱　り

一から十まで理くつゞめで、三百代言よろしくの口上、膝づめのお小言、これなら寧ろ監獄へでも入れたがよからう、子供はさう理窟づめで、ゆくものではありませんものを……。

□追ひかけ叱り

父が叱る、母が叱る、さうかと思ふと、おぢいさんも、おばあさんも、兄も姉も、入りかはり、立ちかはり包圍攻擊です、之れでは子供も立往生でしやう。

□手　引　叱　り

子供が壁に墨をぬります

『マア壁だから宜かつた、屏風へでもぬつたら大變だつた』

とお小言、子供は

『では屏風へもやつて見やうか』

と之れでは惡事の『手引き叱り』になります

□邪　推　叱　り

子供は深い考へもなく、ちよつと惡い事をします、夫れをいろ〳〵と邪推して

『お前は斯う思つてしたらう』

『あゝ考へてやつたらう』

お蔭さまで、子供もだん〳〵邪推深い人になります。

□人前叱り

お客樣の前でお菓子をつまむと

『なぜそんな事をしますか、お行儀が惡いネ』

と叱られます。

子供はいつもの通りだと思つて、ねだります、又叱られます、とう〳〵泣きだして仕舞う、お客さまこそ、いゝ迷惑、ふだんの躾けが肝心。

□おどし叱り

『そんな事をすると、おまはりさんが來ますよ』

『おばけが來ますよ』

とおきまりのおどし文句、ところでついぞ夫れが來たことがない、これでは脅しは全く無効にあります。

□叱り方注意

一、上にたつ人々の手本がよくて、小言をいはずに濟めば極く上に。

二、些細なことは注意にとゞめ、叱ることは、たゞ〳〵がよし。

三、叱るときには、よくその事實を正し、正當に叱るがよし

四、叱るときには、しつかり叱り、なまじなことはせぬがよし。

五、わるい事を叱ると共に、よいところも擧げて子供の伸るところをふさがぬがよし。

六、叱りばかしは大禁物なり、叱つたことは、必ず其の後を監督するがよし。

七、叱りかたは餘りくどくなく、ふるきづを成可くかつぎださぬがよし。

八、惡いのは其の事、子供はどこまでも信用し、學敎するがよし。

九、叱るときは、公平にして、片手たちのことをせぬがよし。

十、叱るときには、其の時と、場合と子供の性質とを考へて、無謀の事をせぬがよし。

叱るよりは邪魔物を片付けよ

子供は盛んに運動して、身体の抵抗力を強くし以つて體力を鍛練させることが必要であります。『健全なる精神は、健全なる身體に陷る』と云ふが、實際其通りだと思ひますから、子供には十分に運動をさせ、大抵の惡戯なら、大目に見ておいて間接に保護するやうにしたいのです。

最も運動遊戯といつても、子供には子供らしい興味がなければ厭きて仕舞ひますから、親は別段干渉せぬやうにしたいものです。殊に男兒は、遠慮なく、盛んに相撲を取るが、何時も疊の上で、ドシ〳〵取つて居ます。

さうすると

『家のなかで相撲を取つてはならぬ』

と叱る親御さんもあるやうですが、大抵の事なら相撲位は取らせるのがよいと思ひます。

最も此の時には、障子は全部明け放つて。假令少し位埃が出ても、空氣が交換するに差支へないやうにして置けば、埃を吸つて害になるやうな心配はありますまい。

相撲を取るために疊は一年に二回位取換へたところで、ドシ〳〵相撲取られて破れて仕舞ひます、然し相撲は、子供ながらも、男性の氣象を發揮するもので、夫れに身體四肢の運動には申分はないから、疊の破れ位は、彼是言つては居られますまい、子供の成育上有益なことなら、多少の犧牲を拂うのは當然のことである故、斯んな事を嚴重に小言を云つて止めたときには、却つて潑溂たる子供の意氣を萎縮させ、鍛へなければならぬ身體も遂に柔弱にさせなければならぬことになります。

子供が相撲でも取つて、疊が早く破れる位ならこの子供は病身な虚弱兒ではないから、親としては誠に喜ぶべきことです、愛兒が病身で後れず藥よ、醫者よと心配することを、常に親が考へましたら

『家のなかで相撲を取つてはならぬ』

と叱付けるよりも

『寧ろ怪我でもしさうな邪魔物を、急いで取片付けるやうにしたい』

之れは子供のために希望するところです。

大震雜感

坂内ミツ

○伏見丸は八月廿八日横濱を出帆して歐洲航路に向ひ神戸に寄港した、九月一日突如としてあの大震大火の悲報は傳へられた、船中の人は等しく驚顎した、續々として至る慘憺たる報導にじつとしては居られぬかつた、殊に東京横濱方面に妻子を殘して居る人は一刻も猶豫する事が出來ない、凡てを抛擲して下船し歸途をいそいだ、事務長某は東京本所に住宅があつた老母と幼い子供を抱いて居る留守宅はたしかに被服廠跡に避難したに相違ない、それが何より安全である、あの廣場ならばと幾分慰めて居るひまもなくあの被服廠跡の慘憺たる模樣が耳にはいつた、どうしてぢつとして居られやう、母の上妻の上愛子の上を考へては何物も顧慮して居られない、時によつたら一命はとりとめたかもしれないけれども住むに家なく食ふに食なく自分の歸りを待つて居るに相違ない、すぐにも職を捨ててかへらう、しかし待てよ此船は私のものではない、船員一人でも下船してしまへば船は進行する事が出來ない、船には多くの外人も乘つてゐる急用を帶びて急いで居る人もある、豫定の日程を變更する事は出來ない、職務のためには私を犧牲になければならない、あゝ行かねばならぬ職務のために、と涙を揮つて神戸を出帆した、果せる哉、此事務長の家族は女中一人が辛うじて生き殘つたゞけで皆被服廠跡にてあえなき最後をとげられた、この報知を得られた時の事務長の心は如何であらう、會社も慰すべき言葉がないとの事である、しかも長き六ケ月の航海は三月のはじめにならねば歸る事が出來ない、定めし今頃は遠く海外にあつて愛子の事を思ふて居らるゝであらう

こうした境遇に居られたのは獨この事務長ばかりではない多くの船員の中には同じ思ひに泣いた人が少くなかつた。

○夢にだに思ひ及んだ事のない大震災に人々生きた心地もなく町内の人々安全な高臺にとあつまつた、時既に五ヶ所に煙があがつた、火事ではあるまいかといふ間もなく烈風にあほられるゝ火の手は遠慮なく燃えひろがつた、水道は一滴も出ない井戸はない、潰れ家の多い神田は見て居る内に猛火につゝまれ一面の火の海と化した、風下にある本郷の高臺ことに弓町あたりは忽ち火をかぶつた、早く避難せよ危い危いと呼びまはる青年團員の聲は悲しかつた、總ての家は老人や子供に怪我させまいと僅かの荷物を背負つて逃れ去つた、不安に滿されながらも男子の多くは現場を去らなかつた又家族を避難させた人も大方すぐに歸つて來た、時既に火の手は猛威を揮つて一方お茶の水の方に進行し一方は北の方弓町におしよせて來た、既に元町から弓町一丁目の大半を燒きつくし將に高臺にのぼらんとして居る、一方の方はもはや高臺に移つて高い下宿屋を燒いて居る、此の時駈けつけて居つた警官の一人熱心に防火につとめて居つたが事いよ〳〵急なりと見るや大聲叱呼して火を消してくれ火を消してくれ國家のためだ火を消してくれと、絶叫した、其熱誠面にあふれ見る人きく人を奪ひたゝせた、誰か默視して居られやう青年團員は倒れんとする家によぢのぼり斧を揮つて破壞につとめた、太いつかを柱にいはいては大勢の力で家をひき倒した、警官の激勵する聲は赤心のほとばしるのである、女も男も働かないでゐられない、家々のバケツを持ち出し湯屋から湯をくみ出し、家々の風呂の水さへくみ出しかけた、石垣を崩しては石をなげ土手をくづしては土をかけ暫くは猛火と戰つた、が猛火も遂に人力に叶はずして消し止める事が出來た、坂の下も亦春日町の青年よく戰つて狹い道路の南側までにて辛くもくひ止める事が出來た、本郷臺の人は皆ホツト蘇生の思をした、この熱誠ある警官の家族もすぐ近くに

住つて居たが、勿論警官は其避難先きは知らなかつた、國家のためには家族も家も顧る暇はないのである。

○こうした美談は至る處に現はれた日常と雖も職業のためには一身を犧牲にする事もあり家族を犧牲にする事もある、我が家に火が移ると聞かされても町のためにはと筒先を放さなかつた消防夫も人民のために妻子の行違を知らぬ警官も子供を救はんがために一命を抛つた先生も學校と運命を共にせんが爲めに我が家の燒けるのも顧みるに暇なく妻子の燒死するのをさへ救ふ事が出來なかつた校長も、會社を死守して遂に火災より免れ得た會社員も、つくす處は皆同じである、職業は異れども職務に忠實な赤き心に變りはないいづれの職業にたづさはる人でもかねてよりかうした覺悟を持たない人はない、それがかゝる非常の場合に遭遇すると明かに認められるのであるたゞ其覺悟に強弱の差あるは己を得ない事である、此度の事變は明かに人の心の底を暴露した、親切な人、不親切な人、公德心のある人、利個的の人、心の大きい人小さい人、大勇の人、小勇の人、知者も、無知者も自分を覆ふ事は出來なかつた、加ふるに不慮の出來事に心奪はれて日頃の覺悟に似ず不覺を取つた人もないとは云はれない、此際にあたつてかゝる美談を忘れず日頃の覺悟を一しほかたくせんと思うのである。

本願寺託兒所について

記者

未曾有の大震災はあらゆるものを破壞した、少くとも凡ての文化の進歩を妨げたに相違ないが幼兒に關する事業は最も大なる打擊を受けたに相違ない、九月一日の夕四方火にかこまれながら幼兒

教育の前途を憂いたのは獨り幼兒教育者ばかりではなかつた。處か事實に反して幼兒に關する社會的事業の聲は高くなり幼兒のために活動さるゝ方が非常に多かつた。之は慥に幼兒教育が盛んにおり各方面の人々の腦裡に明かに刻み込まれて居る事は證據だてるものである、本願寺で經營さるゝ託兒所も其一つである。

本願寺では上野、池の端、淺草、月島、深川等に託兒所を設け尙增所の計畫である、一日上野託兒所を參觀し池田主任より伺つた處によると、こゝは九月十六日に始めたもので十一月十五日迄に入所したる幼兒は四百二十四名、既に退所したるもの三百十一名、在籍は百十四名である、かく入退のはげしいのは、其家族の居住が變更する爲めである、開所の頃はまだバラックも建たず、燒トタンを集めて建てられた假小屋に住つて居た人が多かつたが、元の住宅跡にバラックが出來たり、市のバラックに移つたりする人が多くなつた爲め十月の初め頃はしきりに移轉する人が多く退所が多かつた、同時に上野に建てられたバラックに移り住む人が多くあつたので入所も多かつたわけである、今でも日に三四名の申込みが絶えない、入所許可の方針は一々實地調査をして、兩親ともに勞働せねばならぬ人、家に子供を見てくれる人の一人もない人、兩親病氣のため生計に困る人等を入所させ眞に其必要と認めない人は斷つて居る。

職員は主任一人保姆四人外に炊事係と給仕が一人である、朝は七時より夕方四時迄預り晝食とおやつを與へる定めであるが中には六時頃より出掛ける人もあるので六時にはもう預けにくる人がある夕刻も六時を了つてもまだ迎に來ない人もあるそれ等の子供を飽きさせず寂しがらせぬやうに遊ばせ夕食までさせる事は稀らしくない、中には宿泊させる事もある、或子供は母親の手一つに育てられて居たが、四疊半のバラックに三家族も住んで居るので、同居家族との關係であつたのか二十日以上も迎に來ず自分の居所も知らせないのがあつた、又父親だけの子供もおいて行かれた、後か

ら其父は傳染病にかゝつたため入院した事がわかつた、これ等の子供は皆地震のためにおびゑて居るので、夜泣きはする、物にはおびえるずいぶん手がかゝるが日の重あるにつれて溫かき保姆の手に抱かれ慈悲深き主任の愛になづき父戀しとも母戀しともいはない、安心して居るのである、けれども我子の愛にひかれぬ人はない、二十三日目に迎に來た父親は涙ながらに禮をのべて連れかへつた、かゝる例は少くないとの事である。食事は別に炊事場があつて子供に適したものが調理されるハヤシライスや五目飯、野菜の煮付などに子供等は舌鼓をうつて先生今日はおいしうございましたと喜んで居る、小さい子供には先生が一口づゝやしなつて食べさせなければならないので手がかゝるのである、おやつは先生方の考で牛乳にビスケット、子供パン等其日によつてきめられる。こゝでは普通子供に見るやうに好き嫌をいふ人おく一度も食べないといふ子供を見た事がないのは喜ばしい事である。二間巾に四間の部屋が二つと外に

狹い玄關と事務室だけの託兒所は幼兒の數から見て廣くはない、二間巾であり窓が少く庭もないのであるから遊戯なども思うやうに出來ない、時間が長いのであるから單調を補ふため又日光に浴するため晴天の日は代る〳〵汽車を見たり竹の臺邊の廣場で運動したりして居る。組は年齡によつて二つに分けてある、時間を定めてお話や手技手工などもさせ躾方にも注意して居るが一般に子供の心が荒んで居るので落ちつかない、突飛な質問に先生を困す事も度々である、わけても上野の子供が荒んで居るといふのは周圍に於ける種々の事情による事であらう、けれども之等の子供は熱心なる保姆の感化によつて日に日に善きに進んで行くのは嬉ばしい事である、社會のために一身を顧ないとはいへ六時前よりつめかける子供を預り食事やおやつの世話は勿論顏を洗う事から結髮爪とり下の仕末に至るまで一日一分のひまもなく手も口も身体中を働かしていやな顏一つせず働き通す事は全く犧牲的精神の燃えて居る人でなければ出來

あい、しかも定休日は一日と十五日だけである、尙この間に家庭を訪問して實地調査をされるときいては敬服の外はないのである、宜なる哉迎に來る親の顏には感謝と希望の光が輝いて見える、一人の車夫は妻に別れ二人の兒をこゝに托して一日働いて居るが今日は仕事が多かつたと見え常よりは少し早めに迎に來て二人の子供を車にのせ子供の喜ぶ顏に自分も喜び欣喜として車をひいてかへつたには思はず涙のこぼれるのをどうする事も出來なかつた。

尙本願寺が震災後經營された事業は震災後直ちにハガキ班をつくり十班の人々が一萬枚位のハガきを買ひ集め鉛筆と箱を持つて要所〳〵に陣ぢり用事のある人に書かせたり書いて與へたりして之をあつめ大宮に持つて行つて投函した。又多くの應援者を派出して死人の燒場や倒れ人のある處で讀經をさせた等である。之等の事が終らないうちに一方では託兒所、無料宿泊所、移動浴場、食堂文庫、醫療班、人事及子供相談所、衣類其他の配給等について活動された、衣類其他の物品は全國にある三十六教務所に屬する一萬餘の末寺が協力して寄贈されたもので驚くべき多數に上つたそうである

お茶の水の幼稚園の燒け跡に立ちて

倉橋生

くづれた煉瓦と、うづ高い灰と、焦げた木材の破片との中に、土臺の据石だけが整然と殘つて居る。それが各室の位置と區劃とを、さながらに示して居るのも却つて佗しい。丁度前日、外部全体の塗換え工事を終つて、實に何十年振りの新裝に美を凝らした、あの幼稚園を、今此の姿に於て見

ようとは、餘りに思ひがけないことである。

私は、先づ事務室の位置に立つて見た。それから廊下を通り抜けて、遊戯室へはいつた、その右手の玩具室にもはいつた。それから、組の室を一つ〳〵通つて見た。山の組へ、海の組へ、森の組川の組へ、林の組へ、たゝ氣ぜわしそうに通つて見た。そして、私の見たものは、たゞ「無」であつた。ほんとうに何も殘つてない「無」であつた。

私は、もう一度事務室へ來て、私の椅子を置いて居たところへ立つて見ようとした。その時、灰の中に、赫く燒けぬぢれた圓板の樣なものが靴にあたつた蓄音機の金屬部だといふことが直ぐ分つた。私は、ステッキのさきで、それをたゝいて見た。燒けた金屬の音には特殊の響がある。魂のぬけたうつろといつた風の音がした。と同時に、私の耳には、幼兒達の爲に選んだ、あの幾多のレコードの音が響いて來る樣な氣がした。私は、急に思ひ出した樣に、室の……壁も天井も何もない周圍を見まはした、私の目には、あり〳〵といろ〳〵のものが見えて來る、室の中央には、大きな隋圓形のテーブルが、同僚の笑顏と笑聲との團欒に圍まれて居る。後ろの壁には、古風な獨逸版のフレーベルの肖像が、黑い額縁の中に納まつて居る。其の下には、掘進二氏作の「母と子」の彫塑が、白く立つて居る。正面の壁には、平岡權八郎氏作の「靜物」の大額が、鮮かな青と紅との色を見せて懸つて居る。

ふと、幼兒達の晴かな笑ひ聲が聞えて來る樣の氣がした。秋は、急に淋しい氣になつて、もう一度、組の室の方へ歩いて行つた。低い四角のテーブルが見える。小さい椅子が見える。房々しいお下げが見える。色チョークで草花の描いてあるグリーンボールドが見える。床の上に散らかつて居る大きな積木が見える。紅く輝くまるい頰が見える。私は小さい手にひつぱられる樣にして、廣い遊戯室へはいつた。ピヤノにあはせて、スキップの可愛らしい足どりが聞える。賑かな手拍子の音が聞える。正面には岡田秀作の「富士山」と「太洋」

との二つの大額が見ゐる。其の窓際には蓋を立てた黒いグランドピヤノが見える。右の方の隅には靜に幕を垂れた人形芝居の框舞臺が見ゐる。まわりの壁に沿ふては、懸け並べた、幼兒畫の額が見える。私は、つか〳〵と窓の南の窓の方へ行つて外を眺めた。目の前に、元氣な男の子を滿載した箱ブランコが見ゐる。小山の上には、草の上に蓆を敷いてまゝごとをして居る女の子達が見える。私は庭へ出た。そこには、明るい日光と、葉の廣い大木の軟かな影があつた。「おぢさん〳〵」とよびながら大勢の子どもが馳けて來た。両腕にぶらさがる。後から肩に飛びつく。私はおされながら砂場のところへ來た。……そして、そこで、今ほんとうに私の目の前に見ゑるものは、燒けたゞれながら縺れ下がつて居る藤棚と、しよんぼりと淋しく殘つて居る玄關前の築山とだけであつた。

小學校の方も、女學校の方も、寄宿舍の方も、建てものといふ建てものは、何一つ殘らず燒けて仕舞つて、ガランとして只廣い敷地内には、本校の煉瓦の一部が、毀はれた骨だけ殘して、ローマあたりの廢墟の樣に立つて居る。其の目の向ふには、頭のとれたニコライの會堂が、ペチャンとして空に見ゐる。私は、あちらこちら校内を一周した後、又もう一度、幼稚園の燒け跡へたつた。私にとつて、一番なつかしいところ、やつぱり、あの幼稚園であつた。そして、今度は、すぐ玩具室の跡へ行つて、灰の中をつゝいて見た。何か淋しい紀念になるものでもと思つたのである。しかしそんなものは。どう探しても見つからなかつた。ほんとうに何もなかつた。たゞ僅に見出し得たものは、幾つかの陶器製の白い人形の首だけであつた。私は、ぞつとする樣な心持ちで、それを拾ひとろうともしなかつた。そして、空しく、灰の中にステッキを立てゝ佇立しながら、あの怖しい日が、まだ幼兒の集まらない休暇中であつたことの不幸中の如何に大きな幸であつたかといふことを今更の樣に思つて見た。

附記。　幼稚園は建物と備品との一切を燒きま

したが、職員一同は、其の家を失つたものもなく皆無事でありました。茨木校長も御無事で、大災の當日から引續く多端の校務の間に、幼稚園の方のことも深く考へて居られます。坂内、及川　新庄、小山、崎山、星、桑原の諸君も私と共に、いづれも變りなく勤務して居られます。目下は、……十月二十二日から……小石川區大塚町の帝國女子專門學校内に假保育場を開いて居りますが、來年四月からは、假建築ながら、再びお茶の水へ歸る豫定になつて居ります。園舍は燒けても、備品は失つても、わが幼稚園は、幼兒教育の實際と研究との上に、少しの意氣をも阻喪して居るものでないことを、同情ある先輩、同志、友人諸君に申し上げて、御安心を願ひたいと思ひます。

東京市の罹災幼稚園

○日本橋區

一、日本橋第一幼稚園　一、坂本幼稚園　一、常盤幼稚園　一、城東幼稚園　（以上公立）

一、成志幼稚園　一、梅園幼稚園　一、養德幼稚園　一、大橋幼稚園　一、日本橋高等女學校附屬幼稚園　一、月島幼稚園　一、啓蒙幼稚園　（以上私立）

○京橋區

一、朝海幼稚園　（以上公立）

○麹町區

一、番町幼稚園　一、麹町幼稚園　（以上公立）

○本所區

一、江東幼稚園（以上公立）一、本所幼稚園　一、開發幼稚園　一、東橋幼稚園

一、東川幼稚園　一、文貴幼稚園　一、大谷幼稚園（以上私立）

○深川區

一、深川幼稚園　一、明治幼稚園（以上公立）

○下谷區

一、根岸幼稚園（半倒壞）（以上公立）

一、本島幼稚園　一、味岡幼稚園　一、西町幼稚園　一、岡南幼稚園（以上私立）

○神田區

一、東洋幼稚園　一、佛英和幼稚園　一、興風幼稚園、一、篠原幼稚園　一、神田幼稚園

一、三崎町幼稚園　一、愛の幼稚園（以上私立）

○淺草區

一、吉野幼稚園　一、堤南幼稚園　一、德風幼稚園　一、淺草女學校附屬幼稚園

一、山田幼稚園　一、馨雲幼稚園　一、至城幼稚園（以上私立）

○芝區

一、共立幼稚園　一、啓蒙幼稚園（以上私立）

○本郷區

一、東京女子高等師範學校附屬幼稚園（以上官立）

お春

東京女子高等師範學校教授　岡田美津

八虹の橋

幸兵衛は、臺所の窓際の卓で淋しく夕飯を食べてゐた。彼の妻……『母や』と幸兵衛はいつも呼んでるのだが……は近所の病人を看病しに行つてゐた。

雨は未だ降つてゐた、五時頃になるかならぬのに空は暗かつた。

茶を飲みながら幸兵衛が顔を上げると開いた戸口に、世にも悲しげな子供の姿が見ゐた。お春はあまりに眼を泣き腫らし、悲しさをあり〳〵と面に浮べてゐたので、爺さんは、一寸の間お春だと心付かぬつた。

『おぢさん、入つてもよいの。』

といふ、お春の聲を聞いて、爺さんは、勢よく、

『やれまあ、あの馬車の御婦人客だつたかい。おぢさんとこへ遊びに來さッしやつたンだね。やあ、づぶ濡れぢやねいか。火の傍へ來さつしやい。暑いけれどな、夕飯のものを暖めやうと思つて、火起したンだ。『母や』が居ないンで、ちいとばかり淋しいだ。『母や』は、今夜、節藏さんの看病しについてゐる。さ、その雫のたれる帽子を、釘へ掛けてお、椅子の横木に上衣を引かけて、火の方へ背を向け

て、よう〳〵身体を干しなせい。』

幸兵衛は、いちどきにか、澤山、物を言つた事はなかつたのだが、お春の赤い眼と涙に汚れた頬をちらと見たので、如何して泣いたンだか理由はとにかく、無上に同情したわけなのであつた。

お春は、爺さんが再び席につくまで、暫く默つてゐたが、我慢がしきれなくなつて、せわしく言つた

『おぢさん。私伯母さんの家を逃げ出して來たの。私田舍の家へ歸りたいわ。おぢさん、今夜私を泊めてそして錦ケ森まで馬車で連れていつて頂戴な。私、馬車賃を持つてゐないけれど、將來にどうかして儲けるから。』

『ま、馬車賃の事なんかな、お前とおらの間だから、かれこれ言ふまいよ。まだ二人で一所に出掛けなかつたワな……始終行かう〳〵ッて話してゐながら。河下へだよ……上の方でおく』。

『もう、私富田町も見られないわね。』とお春は啜り泣いた。

『どうしたんだのこゝへ來ておぢさんに話してごらん。』と爺さんは賺した『その腰掛に座つて、すつかり話してきかせなせい。』

お春は、爺さんの手織の着物の膝に、惱む頭を載せて一五一什を話した。感情の强い、經驗のないお春の心には、今日の出來事は、たまらなく悲しい事件であつたが、それでも、此兒は詐らず、誇大せずに話した。

幸兵衛は、お春が話してゐる中、咳をしたりモヂモヂ動いたりしてゐたが、度外れの同情をしないやうにと心を配つて、

『可愛想に、どうかしてやらう』

と口の內でくど〳〵言つてゐた。

『ね、おぢさん。私を錦が森へ乘せていつて頂戴ね』
とお春は、おさけなさうに頼んだ。
幸兵衛は、内心すこし企みがあつたので、
『ちつとも心配することはねい。おらの馬車の御客さんだ。きつと引受けた！、さ何ぞ食べたらいゝ、パンにそのトマトのジャムを付けてごらん。卓のとこへ來て、「母や」の代りにおつて、おぢさんにもう一杯茶をついでくれないか。』
幸兵衛の心の機械は簡單で、愛情とか思ひ遣りとかに押されなければ、クル〳〵早く廻らなかつた。今の場合、幸ひ、愛情と思ひ遣りと都合よく働いてくれたのであつたが、爺さんは、自分の頭の鈍いのを歎き、どうぞいゝ思付きが浮んで欲しいと祈りおがら、やみくもに車を運んでいつて見た。
お春は、爺さんの優しい聲音に慰められ、主婦の位地に座る偉さを怖る〳〵悅んで、にこりとして髮の毛をかき上げたり涙を拭いたりした。
『お前のお母さあは、お前が歸つたら、さぞ喜びなさるだらうお』と爺さんは尋ねた。
さうきかれてみると、ちよつとした心配がほんの一寸したのが……お春の心の奥に芽を出してそれがだん〳〵成長して來た。
『逃げ出したのを、母さんはいやがるでせう。おみね伯母さんの機嫌を取れなかつたッて殘念がるわ。でも私、母さんが合點するやうに話すの。おぢさんも解つてくれたものね。』
『きッと、お前のお母さあが、お前を此地へよこしたのは、學校の事を考へおすつたンだらう。だがお、畑ケ谷の學校へ行けばいゝンだらうて。』
『畑ケ谷には、短期學校があるッきり、あとの學校へは皆遠くて駄目なの。』

『でもな、世の中は「があくもん」にや限らねいや」と爺さんは林檎のパイを食べながら答へた。
『さう……ね。でも、母さんは、學校へやつて私を、ものにする氣だッたのよ。』とお春は、お茶を飲まうとしたが一しやくり一寸泣いた。
『田舍で家族揃つて暮らすもいゝな……子供が大勢居てよ。』と優しい爺さんは、お春を抱きよせて可愛がつてやりたい程に思ひながら、口ではさう言つてゐた。
『あんまり大勢すぎるの……！それが厄介なのよ。私、お花姉さんを代りに河崎によこさう。』
『伯母さん達が承知するかね。しめいとおら思ふよ。お前が歸つてしまつたッて、腹ア立つことだらう腹あ立つのも無理やねいからな。』
お春が、無情の伯母の家を逃げ出したために、お花姉さんも來るわけに行かない……といふのはお春の思ひ付かなかつた事だつた。
『この河崎の學校はどんなだね……なか〳〵いゝのかへ。』と爺さんは尋ねた。爺さんは我ながら驚くほど頭腦が敏速に働くのであつた。
『え、いゝ學校よ！、そして寺岡先生ッて立派な先生よ。』
『その先生を好きかい。先生の方でもさうあんだらう。うちの「母や」が、先刻、節藏さんの膏藥を買ひにいつた時に、橋の上で寺岡先生に御目にかゝつたンだと。そして學校の話が出たンだ……「母や」は小學校の先生達を下宿さした事があつて、先生達を好きあもんで。畑ヶ谷から來た子供はどうですつて「母や」がきいたところ、『あ、あの子は學校中で一ですッて、寺岡さんが言ひなすつて「生徒がみんな近藤春子のやうなら、朝から晩まで敎へてゐられるッてあ。』
『あら、ほんと、おぢさんと。』お春は、上氣したやうにあつた……その顏は忽ち光るばかりに冴々とあ

り笑みこぼれて『私一生懸命やつたのよ。でも、もつと〳〵これからしやう。』

『もし此地に居ればッていふ事あんだろ。』と爺さんが口を挾んだ。『おみね伯母さんのために、そんな事も、みんな、廢めちまふなあ、惜しいもンでねいか。おら、御前を咎めるンでねい。あの人ア、氣狂染みてゐてそして意地が悪いンだ。きつと、澁柿でも食ッて育つたんだろよ。こつちで余ッ程、辛抱しおい事にやとても、お前さも、あんまり堪忍强い方ぢやあるめい、え。』

『え。』とお春は、陰氣に答へた。

『もしお』と爺さんは續けた『昨日此話が出たンだとすると、おら、また別の考持つたらうが、何しろ今となッちや間に合はぬい。おら、御前がどこまでも悪るいンだッていふぢやねい、だがな、こうならねい前の話にしていへばだ。いゝか、お前の伯母さんが、食べさせて、着せて、その上に學校へやつて、將來に倉山の女學校へ大金かけて出してやろうッて言ふンだ。あの伯母さんて人は、一所に暮しにくい人でお、恩に被せたがつて……だが、恩は恩だ……お前の方で優しくして、ま、その恩の返しをするのが本當だらうな。よねさんの方がちいとましだろ。それともやつぱり氣むづかしいかね。』

『あのおよね伯母さんと私は仲よしおのよ。』とお春は勢こんで話し出した『もう、それや親切で優しいの。私だん〳〵あの伯母あん好きになる。伯母さんも。私が好きなんでせうよ。一ぺん私の髪を撫でてくれたわ。あの伯母さんにおら一日叱られてゐてもよい。解つてゝくれるから。だけど、おみね伯母さんの前ぢや、私の肩を持つてくれないの、私みたやうに、おみね伯母さんを怖がつてるンですもの。』

『よねさんは、お前さんが去つてしまつたのを知つたら、明日さぞ力を落とすだらう。だが、もう仕方がねい……おみねが口喧かましくて、一所に居ても面白くねいとおると、およねさあは、お前さん

が居るのを樂しみにしてゐたらうにね。うちの「母や」がこの間の晩、祈禱會のあとで、およねさと話したッて言つてたッけ「今の家は、もとのやうぢやない、私裁縫のお師匠さんを始めたところがね、たつた一人ある御弟子がもう三枚着物を拵へましたよ、子もない年寄りにしちや、大出來でせう、私これから日曜學校の組を一つ預つて、お春と一所に遠足にいつたりして、少し若返へるつもりです」てッおよねさが話しなすつたと。母やの話に、およねさは若くなつたッて』

すると臺所の中は森としてしまつた。背の高い柱時計の音とお春の胸のドキ〳〵するする音とだけ。お春には、時計の音も自分の胸の鼓で打消されるかと思はれた。雨が止んで、薄桃色の光りが臺所に一抔に入つて來た。窓から見ると、虹が、天の端から端へ七彩の橋を架けてゐた。お春は考へた。橋は越せないところを渡してくれるものだが、幸兵衛おぢさんが、丁度橋を架けてくれて、今の難儀を越さしてくれるんだと。

爺さんは、煙草を塡めながら、

『夕立が上つたね。空氣がきれいにあつたし、地面も何もかもきれいにあつた。明日、お前さと、河上の方へ馬車で行くといろんなものが清潔だらうよ。』

お春は茶碗を押しやつて立ち上がり、靜かに帽子と上衣を著はじめた。

『たぢさん、私河上の方へ乘つて行かないわ。私此所にゐるの……そして叱られてゐるわ。怒らないで叱られて置くの……こんなに逃げ出したりしたから、おみね伯母さんが家へ入れてくれるかどうだか分らないけれど、私この元氣のあるうちに行くの、たぢさん、一所に行つて下さらない。後生だから。』

『よし來たおぢさんは、この事件が無事に片がつくまで、お前の傍を離れるこッちやねい。大丈夫、請

合つた。』

と爺さんは嬉しさに怒鳴り立てた。『もう、今夜は、お前さ、ずいぶん辛い目見てゐる。可愛さうにな、病氣にもなりかねない。それにたみねさ、きつと、機嫌わるくしてゐて理屈言つたッて、聞き入れるどこぢやあるめい。でだ、おらの考はかうだ。お前さを馬車へ乘せて煉瓦の家まで行くンだ……隅ンとこへ知れねいやうに乘せて……そしてあ、おらが降りて横手の入口へ行つて、みねさとよねさとを物置へ連れ出して、この二三日中に、する約束してある薪の事の相談おッ始める。その間にお前さ、馬車からソッと出て二階の室へいつてしまふンだ。表玄關の戸は緊りがしてあるまい。』

『夜でも今頃はまだしまつてゐい。』とお春は答へたが『おみね伯母さんが床へ入るまでは開いてるのよでも……もし、しまッてゐたら如何しやう』

『何、しまつてやしまい。もししまつてゐたら、仕方がねい。表向きに大びらにやるまでだ。だが本當は大びらにやらずに、こつそりした方がいゝ事も世の中には、澤山あるンだ。いゝかね。お前さは、まだ逃げたンでねいよ。逃げようと思ふがッて、おらのとこへ相談に來ただけなンだ。それでお逃げる程の事もあるめいと二人で定めたンだ。いゝか。お前のした惡るい事ッていふのは、おらの考へるとこぢや、寢でゐろと言はれたのに、窓から脫けてこゝへ出て來たとこにあるンだ。それだつてさう極惡いンでもないから、こんどの日曜あたりに、よねさの心がしんみりしてゐる時、話してごらん……そしたら、たみねさにも白狀した方がいいとか何とか敎へてくれるだらう……、さ、おいでゐせい。郵便局へ行かうと思つて、馬車の支度は、すつかり出來てるンだ。風呂敷包を忘れなさンな。

「寢衣をもつて出ると、それは旅行よ母さん」とお前さが言つたッけ。あれが、おぢさんがお前さの物言ふのを聞いた始めだ。お前さんがおらの家へ寢衣を持つて來ようとは思はなかつた、さ中へ入つて

隅ンとこにちいさくおつておいで。逃亡したとこを他に見られたらいけない……新規蒔直しをしに戻るンだからな。』

……

お春はそッと二階へ上つて暗がりで着物を着換へて床に入つた時、身体は疲れ痛んでゐたが、穏やかな心持が、次第々々に胸に擴がつていつた。とんだ失策をするところをしないですみ、母親に心配もかけず、伯母達を怒らせたり恥をかゝせたりもしないで濟んだのを嬉しく思つた。今は、お春の心も解けてどんな骨折をしても、おみね伯母さんの歡心を得ようと決心した。（つゞく）

編輯室より

暑い暑いといつて九月號を八月二十八日に發送してホツト一息つくと、大震災で印刷工場は倒壞する慌けると自然の制伏には人力の如何に脆いかが判然と見せられました。編輯部の一同も一時は其安否も不明でした、發行所主人は折惡く日本橋區に居たために火災に追はれ隅田川へ逃がれ、川中では船火事に襲はれ一時は生命も危うかつたのです。好運にして今日皆無事で再び誌上で諸君に御目に掛れるのは何より幸福と存じます。惡い大正十二年も本月で終り、新に復興の春を迎へ大いに努力の決心です、思へば九月一日は一生忘れぬ印象の深い日でありました。會員の内でも御不幸に遭はれた方が大分にあると思ひますが是等の方へは深く御同情申上ます。

大災後一般に幼兒教育の問題が非常に重視されて來ました。我々の使命は幼兒教育にあるのですから努力を惜まず、この大切な使命を皆様と伴に果したいと存じます。

皆様から澤山の御注文を頂いた坂内みつ子先生の『子供の遊ばせ方』は製版半途で焼失に遭ひましたが幸に原稿が助かりましたので一月末には發刊の豫定です、流石に幼兒教育專門家の著書であると思はれる實に行屆いた内容に編輯部一同が敬服する良い原稿です、近頃珍らしい本であることを茲に申上げて置きます。

定價表			
冊數	定價	郵稅	
一冊	金參拾五錢	金壹錢	
六冊(前金)	金貳圓拾錢	不要	
十二冊(前金)	金四圓貳拾錢	不要	

廣告料		
表紙前附	金七拾圓	一頁以下御斷
表紙裏附	金七拾圓	同
普通面一頁	金四拾五圓	同

御注意

(外國行郵稅は一部十六錢の割にて御拂込下さい)
□本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六壹壹壹番教文書院)
□前金切れの節は帶紙に「前金切」と致します
□郵券送金の節は一割增で一錢…手に願ひます
□本誌の一切は教文書院宛御照會下さい

大正十二年十二月二十日納本
大正十二年十二月廿五日發行

第二十四卷第十二號

東京女子高等師範學校内日本幼稚園協會
編輯者 倉橋惣三
發行者 越元新吉
印刷者 埼玉縣大宮町 星澤勝平
印刷所 埼玉縣大宮町 秀飯舍印刷所

無斷禁轉載

東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)
發行所 教文書院
電話下谷三〇四七、一九五一番
振替東京四六壹壹壹番

理學博士 山口鋭之助先生
文學博士 藤岡勝二先生 監修

教文書院編輯部編纂

カレント學生參考書

現代學生知識の泉源！
豫習復習受驗の要書！

學生の良師とあれ
簡にして要を盡せ
確實にして權威あれ
學習に興味あらしめよ

これが本書編纂のモットーである。

近時諸種の學生參考書が續々と出版されるが、不備不正確なものが多く、學生諸君をして其選擇に迷はしめるは吾人の最も遺憾とする所である。吾がカレント參考書は特に是等の點に着眼して前條のモットーに基き、理學博士山口鋭之助、文學博士藤岡勝二兩先生監修の下に、各々專門家之を分擔し鋭意完成したる模範的良參考書にして、豫習、復習、受驗に必要缺くべからざるものである。

新型ポケット正價各冊金五錢
送料各四錢

日本地理	上下二冊	算術	一冊
外國地理	上下二冊	東洋史	一冊
物理學	上下二冊	國文解釋	一冊
化學	上下二冊	英文法	一冊
幾何	上下二冊	地理概論	一冊
代數	上下二冊	動物學	一冊
日本史	上下二冊	植物學	一冊
西洋史	上下二冊	生理衛生	一冊

發行所 東京上野公園寛永寺坂下上根岸八十八番地 教文書院
（振替東京四六壹壹壹番 電話下谷三〇四七番）

復興版

ローマ字第一讀本

理學博士 山口鋭之助先生
川副佳一郎先生 著

文部省檢定出願中

社會の進歩と共にローマ字の必要は、日に月に加はり、子供達のローマ字を求める熱望も漸次高まつて行くやうに思はれます。日本將來の爲め、此の際第二の國民たるべき一般少年少女達に、ローマ字の知識を與へることは極めて大切なことであると存じます。本書は最も完備した初學用ローマ字讀本として兩先生の苦心編纂に成れるもの、現に全國各地の小學校、補習學校で、ローマ字教科書として本年度採用學校數四百八拾六校、冊數貳拾參萬部の多數を印刷致しました。第三學期の兒童補習には是非御使用をお勸めします。

ローマ字第一讀本　價金二十五錢
ローマ字第二讀本　價金二十五錢
ローマ字第一讀本〔教師用〕　價金二十五錢
ローマ字習字帖　價金二十錢

東京上野公園寛永寺坂下
（上根岸八十八）
發行所 教文書院
振替東京四六一一一番
電話下谷三〇四七番

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可　大正十二年十二月二十日納本